

一粒の芥子種

水野 仙子

一
その夜殆どもう死んでゐた子供を病院に昇き入れた時……と彼女は熱心に語りつづけた。

病院は或る富豪の一族が資金を投じてゐる大きな施療院で、その富豪の姓をかぶせて××慈善病院といつてゐました、私はそれまでそのやうな病院が、私にとつて辛くばかりあつたこの都市に、しかも私達を救はうとて存在してゐやうなどは、夢にも思ひ寄りませんでした。K區の裏町の暗の中に黒く聳えてゐた一塊の建物は、固く閉ざつた門の潜りを開いて無言の人達を吞みました。その出鼻にチラリとさした門衛の灯が、おづ／＼としてゐた心には殊に丁度監獄の門でいゝを潜るやうな思ひ

をさせましたけれども、亦その戦う足は、戸板に添つて玄關まで運ばれる間に、幾たびその砂礫の上に躓かうとしましたでせう。子供は助かるに違ひないといふやうな希みが、その閾を跨いだ刹那に、今までの絶望を力強くはね返して私を動かしたのでした。何事も冷たく一人覺悟をしなければならなかつた私は、今は希みの芽生と共に却て惑亂させられるのでした。

殆ど絶えてゐた脈は醫者の注射によつて漸く起りました。けれども弱く絶えぐに、如何にもこの世のたつた一人の母に心を残すやうに極めて微かな動きを指先に傳へるものでした。冷たい床に擦れる草履、白い醫者の上着や、見馴れぬ器具を取扱ふ看護婦の手つき、そんなものに一々私は胸をひやしなから、氣をつめてゐるので息も苦しく、たゞ助かりませうかといふ思ひばかりを露骨にして、

醫者や看護婦の顔色にそれを讀まうと苦心しました。

その夜が峠でした。子供の命は不思議といへば不思議な廻り合せから、その夜の當直の醫師の手に委ねられることになつたのです。それが決して假り初めなことではないやうな、何かしら運命といふものに就て考へさせられるやうな、不思議な心の味はひを私はその夜覺えました。そのしんみりした心は、この特殊な病院の空氣に親しまうとしてゐながら、不幸な過去からすべてのことに先づ裏を見てかゝるべく養はれた私は、施療といふ文字にひどく神經質になつてゐたのでした。で看護婦達からもさぞ冷たい扱ひを受けることゝ、殆ど確信のやうにさう思つて、おさゝく警戒の心をゆるめません

でした。けれども私は間もなく、その淺猿しい心に自ら恥ぢなければなりません。醫者も看護婦も自然敬語こそは使ひませんでしたけれど、決して親切を缺いてゐるとは思はれませんでした。それどころか、私の豫期しなかつた熱心が、子供の命に對する熱心が、その微かな息使ひに目と耳を凝らしてゐる醫者の顔に見られた時、私は思はず我を忘れて掻き口説きました。「どうぞを生かして下さいましこの子を! どうぞ生かして下さい!」

野村さん——その名はあとで知りました——は、醫者が引取つたあと、何や彼や、そこらを仕末して、病院の規則などを私に話してくれ、それからともかく今夜が大事だからと、安心はさせながらも亦一方に警戒を忘れさせないやうな口振りで醫者の言つたことを傳へてくれました。そしてその夜はまんちりとせす——傳染病室で折よく外にあまり患者がなかつたので——私と一緒に子供の枕邊を守つて明しました。

ある大きな、どうすることも出来ないやうな力が、いつこの憐れな母子の上に落ちかゝつて来るかも知れないといふ恐れから、時の經つのが怖かつた一夜も、兎に角無事に明けました。たゞそれだけの恵みが、私にはどれほど嬉しかつたことであらう? 顔を洗ひに出て、初めてそこらを見廻すと思つたよりも大きな、設備の整つた病院で、しかも貧乏人には勿體ないほど小綺麗にみえました。昨夜遅く痛い胸を抱へて彎曲りかして來た廊下には、身輕な看護婦達の姿がそれ／＼忙しうに行き來して

りました。遙かに病室の方から赤兒の泣聲なども聞え、水道の水は爽かな響をたて、送り、厚く高い石塀の上部から射して来る朝の日光は、開かれた窓硝子を透して何處となく藥の香の満ちた廊下にそゝがれてゐます。ふと私の胸は微かな痛みを覺えました。齒磨粉、楊子、紙、手拭、このやうな日用品までが、無代價で供される有難さ——といふよりも羞恥の心、それは私が今まで自分一人を衛るの餘儀なさ……たとへばたに及ぼす迷惑を憚んだとはいへ……髪の毛一すぢの施しも人に與へやうをはしなかつたといふ心咎めに基きました。

その日の午前には、この病院小兒科の〇博士の診察をうけましたが、博士は私の無言の間には答へやうとせず室を出て行きました。しかしそれがまたまことに確かな答へでもありました。子供は依然として昏睡から覺めず、際だつて變化のない代りには、一刻々と危険の域に進んでゐるのが私の目にもわかりました。私は再び絶望の底につき落されました。

あゝ併し、子供はやはり救はれることが出来ました。私はその時のことを思ひ出す度に、神様と、それからあの病院の人達——野村さんや先生達は云ふに及ばず、賄ひのおかみさんから小使ひに至るまでにも、感謝の心を新たにしないわけにはまわりませぬ。子供が白い寢床の上に起き上つて、白い寢巻、それがあの子の體には少し大き過ぎた、しかしそれがまた却て可愛くもみえた、あのともすれば手を隠さうとする行きの長い袖を手繰り上げ、色紙の折鶴を持つて遊んでゐる姿が、あゝ今で

も目に見えます。子供はよく醫員からも看護婦達からも可愛がられました。あの人は大抵育ちのわるい貧民を扱ひつけてましたから、あの子の聰い黒目がちの眼と、味噌ッ齒と笑窪がみんなをひきつけたのです。野村さんがさういつてました。

さあ子供は大丈夫となると、私の體は半日とても便々としてはゐられないのでした。事務といふものに一月づゝ私の體は買はれてゐたのですから、さう／＼怠るわけにはまゐりません。それにせめて一日十五錢づゝの食費なりとも――出される者からは附添の食費としてそれだけづゝ徴収することになつてゐました――働きたいと思ひましたので、心苦しかつたけれど夜は病院に寢泊りし、さうして晝は自分の仕事をしに出て行きました。初めのうちは何となく下足の男にも肩身がせまく、愛想ツ氣のない門衛が、大きな古い眼鏡越しに出入りを監視するのが、身の縮むほど怖いやうな氣がしました。が、それも馴れる……といふよりは、決して人は好き好んで惡意を持つものでないといふことに氣がついてから、私に取つては凡そあの時分ほど温かい氣分で過したことはないやうな氣がします。私は全く家庭の暖かさといふものを知りません。あの施療院の三週間ばかりが、私の一生にたい一つの温かい思ひ出であるほども……。

子供の罪のない徳のために、私までが皆から大切にされるやうな氣がしました。少くとも外の人達よりは、ずつと好意を持たれてゐたことと思ひます。あの人は規則を人情でいゝやうに取纏つて、

何かと私の便宜を計つてくれました。子供は日に／＼快く室内の散歩を許される頃には、看護婦達
が争ふやうにしてあの子をおぶつたりなんぞするのでした。誰れに飼はれるともなく、病室を廻り歩
て牛乳の残りを貰つて歩く親猫ともすぐに仲善くなりました。

すつかり病院の空氣と人々に眠んだ子供は、いよ／＼明日は退院といふ日の夜、私からその事を聞
いて、外の空氣を憶れる心の喜びと一緒に、子供相應な残り惜しさをあからさまにその顔に見せてゐ
ました。今更に子供を救ひ得た喜びが私の胸に湧きかへりました。私の命と、私の希みのすべてが再
び私にかへたのです。まして得難い心持ち、冷たく狭く固くばかり私が世の中に置いた心持ちに、か
すかながらも灯がともされたやうな心廣さ——それは私どものやうに不遇に遇して來たものに取つ
て、どれほど嬉しい氣持ちでございましたらう？ 初めて人の懷しさをしみ／＼させるのに適當した
やうに、それは静かな初秋の一夜でありました。

「とうちやん、ほんとにお前はしあはせねえ、どなたにも可愛がられてねえ、さあ、野村さんによつ
くお禮を申上げるのですよ、おかげさまでとみ子は命拾ひをいたしましたつて。」

私は寢床の上にもちよ／＼と坐つてゐる子供の手を取つて、涙ぐむやうな心持ちでさういひました。
感謝か、喜びか、何かしら洩らさなければならぬ思ひが、胸にひた／＼と漂つてゐるやうな氣がしま
した。しかもその感謝の念を、まづ誰に向つて捧げねばならないのかを私は知りませんでした。

「おかあさま。」と節をつけて句切つて、子供はぢいつと私の顔を見つめてゐました。「とみ子は神様に救はれたのですつて！」

私はえ？　といつたまふ思はず吃驚してその手を離しました。時々思ひもかけず賢しいことを言つて私を驚かすことはありましたけれど、こんな言葉があの子の口から、しかも不思議な力を帯びて言はれませうとは！　私は黙つて子供の眼と、それから微笑んでゐる野村さんの顔とを比較しました。暫くして私は、自分が留守の間の晝のことを考へ、そしてすべてを了解することが出来たやうな氣がしました。

子供を枕につかせて、その寢息に耳をすましてから、私は折よくそこにはひつて來た、野村さんの方へと自分の腰掛けを運びました。

「あなたはクリスチャンでゐらつしやるんですか？」

「はあ。」

一體私は何を野村さんに尋ねやうとしたのでせうか。豫期通りの答へを聞くと、私は暫く黙りました。私はそれまで神については全く無智でした。たゞキリストに關しての漠然とした知識が、話の緒を見つげやうと胸に手を當てゝゐると、野村さんは突然、

「あなたは盛岡の方のかたでゐらつしやいませんか？」といひます。

「え、どうして御存じですか？」

「さうぢやないかしらと思つてました。どうも言葉の調子が……もうすっかりぬけてらつしやるやうだけれど、それでもどつかにかう、さうぢやないかしらと思はれるやうなところがありましたから。」

「ぢやあなたも？」

「いゝえ、私は半年ばかりあちらの方に傳道に行つてましたから……」

「まあさうでしたか。」

私は道理でといふやうな氣がしました。初めからこの人が外の看護婦達のうちになんとなく違つてみえましたから。初めは婦長かと思つたらまだ見習生だといふし、それでは女醫になりかけの人でもあらうなど、獨りできめてゐたのでした。

「では傳道師でゐらつしやるんですね。」

「え、一寸まあ。」

「ぢやどうして看護婦なんぞにおんなさいまして？」

「そらとう／＼あなたもさうお聞きになりましたね、とう／＼と野村さんは私の言葉を遮つて、あの悦びを感じるものゝやうに、併しまたきはめて靜かに落着いて、床几を私の方へと近寄せました。『お話しませうか、なんだかあなたにはその甲斐があるやうに思はれますから、あなたはたい一圖に

私を感じた人間……そして人はまた私を極單純な人間なんだつてさういふんですよ。それはさうかも知れないけれど、私自分ではもつと意味のあることだと思つてますの。あなたはそれを感じて下さることが出来る方のやうな氣がします。ですからみんなお話ししてしまひませう。」
さうして野村さんは語り出しました。

二

『或る日のこと私は教會の歸りに電車に乗りました。その時は丁度伊豆の方の傳道から歸つたばかりの頃で、また私の長い間の勤當が解かれた時分でした。私は洗禮を受けた十七の年からその時まで、一度も親の家に歸ることが出来ませんでした。——私がさうまでに信仰を得るやうになつた動機について、いづれまたお話しする折がありませう——それから五年目にやうく私を容れた母や親戚の者は、今度はすぐに結婚談をもちかけて私を困らせました。なんでも信者でさへあれば、私が一も二もなく承諾するものと思ひ込んだらしいのです。丁度それに惱まされてる時分でしたから、別段それによつて私の信仰がぐらつきはしませんでしたけれど、なんとなく將來のことなどが考へられました。けれどそれは決して如何に自分の身を處さうかと思ひ煩ふのではなくて、神様はこれからの私をどんな方面にお使ひなさるのだらうか、どうしたら一番神様の御意に叶ふ生涯を送ることが出来るだらうか、』

うかと、今身の廻りに起りかけてゐる障害につけても、いろ／＼と心をいたまされました。
そんな折ですからいくらかばんやりしてゐたものとみえ、乗つたところも知らなければ、また電車
などがどこをどう走つてゐるのかも知りませんでした。勿論のことその電車の中に、どんな人達が乗
り合せてゐたかなどと氣がつかう筈ありません。私は隅の方に腰を下して靜かに聖書を開きまし
た。と丁度その時、車掌が私の前を通つてづつと中の方にはひつて行きました。暫くすると、別段に
話聲をたてたわけでも、また異常な物音がした譯でもなんでもないのに、何かしらある出来ごとが
車内に起つたらしく私に感じられました。私はふと顔をあげました。あゝなんといふそれは恐ろしい
光景だつたでせう！ 向ふ側の中程に、顔の形もないほどに脹れあがつた一人の癩病やみが、それも
どうして電車になぞ乗つたのかと思はれるやうな身なりをして腰を掛けてゐました。その兩隣りには
二三人づつも腰掛けられるやうな空席を置いて、人々は入口の方に固まつて立つてゐました。目とい
ふ目はみなこの哀れな男の上にそゞがれてゐました。ある者は嘲けるやうになんともいへぬ皮肉な笑
ひを口許に浮べ、また多くの人はこの穢はしい電車に乗り合せたのを忌々しがるやうに眉をしかめ、
また或る者は腹立たしさうに舌打ちをして顔をそむけました。淺猿しい姿の男は、さつきから帽子の
へりに挟んだ歸りの切符を取らうとして熱心にその仕事をつゞけてゐるのです。けれども指もな
く顔れた赤裸の兩手は、僅かに親指らしく認められるものゝ力では、どうしてもそれを抜き取ることが

出来ないのでした。車掌はその前に少し離れて立ちほだかり、かうした者の手からでも切符を受取らなければならぬ迷惑さを、人々に了解して貰はうとでもするやうに、ぐるりと見廻しては顔を顰めてゐました。

私は一目見て恐ろしさに思はず冷水をあびたやうな気がしました。この病氣を恐れ厭ふ心は、私も決して人並はづれては居りませんでした。ある思ひ出のために却つてそれが強くも烈しくもこそあれ、決して身慄ひなしに見ることが出来ませんでした。殊にその時私を畏れさせたものは、目の前に見るその淺猿しい男の姿よりも、折も折、何氣なく披いて見てゐた聖書の言葉でした。——イエス山を下りし時人々これに従へり、癲病の者來り拜して曰けるは、主もし旨に適ふ時は我を潔くなし得べし、イエス手を伸べかれに接けて我旨に適へり潔くなれと曰ければ癲病たゝちに潔まれり——その言葉が不思議な力をもつて私の心に生きました。私はつと起ち上りました。

哀れな男は人々の敵意に氣を焦てば焦つほど、益々その仕事は思ひに委せませんでした。今や彼は絶望と憤怒に恐ろしい呻きをあげ、我と我身をぶつゝ罵りはじめました。鉄みの入つた切符を再び哀れな男の不自由な手に握らせやうとした時、私の手はこの世のものとも思はれないやうに不氣味な冷たさに觸れ、思はず戦いてしまひました。

私はそのまゝ電車を見棄てました。どこをどう歩いてどう出たのか、知らぬ間に私は郊外のさびし

い静かな野の道をとぼくと歩いてゐました。私の胸はその心の勝利に惑亂してゐながら、又力強い憂鬱にとざゝれてゐました。割合に落着いてはゐましたけれど、又ある決心に興奮してゐました。暗示された我將來の仕事に全身をあげて勇まうとする心の傍には、いつの間にか大きな恐怖がその翼をひろげてゐました。あゝ、それはどんな決心であつたかと人は容易く問ふことが出来ます。終世衰れな業病者の慰藉者となり、よしやその體に手を接けて醫したキリストの奇蹟と權威は持たずとも、神の愛をもつて哀れな人達の魂を救ふために、一身を捧げる覺悟をしましたと、私も今は可なり造作なくお答へすることが出来ます。けれどもその決心の底に、怖れや惱みや痛みの影が少しもさゝなかつたとはどう想像することが出来ませう？ キリストでさへ十字架の惱みの前に、吾父よもしかなは！この杯を我よりはなち給へと祈られたではありませんか！

あなたは私があまりに偶然を神祕化してゐるやうに思ひになります。あなたのその眼がさう言つて居ります。けれどももう少し先を聞いて下さい。私がさういふ考へになつたのはその日が初めていはあつたけれど、併しそれは私の心が愚かさに盲ひてゐた爲めに私に現はれなかつたので、神様の思召は決してその日に初つたものではありませんでした。先にも申上げたやうに、私がふと將來に躓いた時に際して、初めて神様が御旨を明かになされたのです。——私は昔を追想しなければなりません。それを思ひ出すたびに私の胸は新たに疼きます。自分の固い決心のために母の保護を失つて宣教師

N 夫人の家に身を寄せてゐた私が十八の年でした。その山國の町にAといふ一人の青年が住んでゐました。他所から來た人で、中學卒業の免狀で町の小學校の代用教員をして居りました。熱心な信者で、頭もよく、この人の祈禱はいつも刺すやうに人を動かしました。僅かな月日の間に私がAと親しんだ速度は非常なものでした。Aも亦熱烈にしかし清く私を愛しました。二人が孤獨の感じは二人を家族的に結びつけました。無口な人でしたからAが常にその郷里と家族について語らないのを私は少しも怪みませんでした。またそれほどあの人を孤獨にするほどの事情を、私は自分に引較べて極單純に考へて同情してゐました。しかしそれも束の間でした。間もなくAが私に對するをよりは餘所々々しくなりました。如何にも私を避けるやうに、いや／＼それは私にばかりでなく、Aは非常に人を恐れて避けるやうになりました。私は人知れずどれほど胸を痛めてAの眞意をさぐるのに悩んだでせう。解かうとしても解けない謎は、私がAを信することが深ければ深いほど纏れて來るのです。あれほど熱心な信者が、今は日曜毎の集りにも顔を見せず、奉職してゐた學校の方にも辭表を出したまま、一日下宿の一間に籠つて何事かに考へ沈んでゐるのです。狭い町のことゝて下らぬ噂さがたつのを恐れ、私達は決して教會と夫人の宅以外では逢つたことがありませんでしたから、私はたいやばかりにあれこれと思ひ悩みました。するうちにふと、それは聞くも恐ろしい噂さがふと私の耳に這入りました。併しそれはあまりに思ひもかけぬ恐ろしいことでしたので、私は却てそれを信じない位

でした、忌はしい血のためにAの姿が變りつゝある、あゝ私にそれが信じられませうか？ 信ぜられませうか？しかし信じまいとしてもその心を裏切るものは、解きかねたAの近頃のそぶりでした。一々それはその噂に思ひ當る節々ではありませんか。私は深い谷底にでもつき落されたやうな氣がしました。さうしてそれを確めることの恐ろしさに、私は決してその眞偽を人に質さうとはしませんでした。

けれどもとう／＼恐ろしい夜は來ました。Aは絶望のためにその恥しい姿を永久に人の目から葬らうと決心をしたのです。あの人は、やはり信者で親切な宿のお婆さんに書置をして以後のことを頼み、さうして夜更けて靜かに家を脱け出しました。その夜私はなんとなく目が冴えて眠れなかつたので、ひそかに起きて蠟燭をつけ、詩篇のあるところを讀みかけてゐました。と、けたましく飼犬が吠え出して人の足音がします。はつとして聞き耳をたてゝゐると、足音は門を避けて夫人の室に近い垣根の方に廻り、そして急ぎ込んで夫人を呼び初めました。その聲は他の人に聞かれるのを欲しないやうに、然し早いのを希むものゝやうに情に迫つてゐました。その聲がふとAの宿のお婆さんだといふ氣がつくと、私は再びはつとしました。胸は早錦のやうになり足は慄ひました。窓の雨戸の隙から外を窺ふと、間もなく夫人の室からぱつと燈がさして、二言三言早口に言葉が交されると、「おゝ」と低いけれど力強く叫んだ夫人の聲が、身も縮むほどに私の胸を打ちました。Aの上に何事か起つた

のだ！ さう思ふと私は前後を忘れました。夫人が間もなくお婆さんに伴はれて何處ともなく出て行つたあと、私は盗人のやうに家を出てその後を追ひました。

町端れの踏切りに近い並木の中まで遠い足音を逐つて行つた時、遙かな闇の中に何事か言ひ争ふ人聲を私は聞きました。急いで近づくと、夫人の不完全な日本語が熱心にAの決心をなだめやうとしてゐるのです。私はたい嬉しさに我を忘れて、自分が今どんな行為をしてゐるかも知らずに息せきと駆け寄りました。

Aは今朝かにうなだれてゐた首をあげて後をふり返りました。さうして私を認めるや否や、近づいた私の眼に見入るや否や、堰かれた水の溢れるやうに、「わッ」と聲をあげてくると顔をそむけ、男泣きに泣き出しました。私ははつとして足が竦んでしまひました。如何に前後を忘れたとはいへ、なんといふ私は心ないことをしたのでせう！ 私は……私はやはり聲をあげて泣き出しました。

「勘忍して下さい！ 勘忍して下さい！ 歸つて下さい！ 神様が……祈ります、祈ります！ 私は一生……」

私はしどろもどろに叫んで、そのまゝ後をも見ずに一散に家に走りかへりました。そしてその夜ひと夜泣いて泣いて泣き明したほどの涙を、私はまだ外の場合に経験したことはありません。恐らくはあの時に私の一生の涙を絞り盡したといつてもいいやうな気がします。

私があの人の顔を見たのはそれが最後でした。その夜Aは眞に自分に同情してくれるならば、このまゝ見通してくれと言つて泣いたさうですけれど、夫人とお婆さんは神の愛のために漸くあの人の決心を翻へさせることが出来ました。Aはその後以前にも増して熱心な信徒となり、人々も亦あの人のために力を合せて神に祈ることをしました。私は間もなくS學院に入學のため上京することになりましたが、暫くするとAが肉體的にも清められて、益々その信仰を固くし、教會の爲めに働いてゐるといふことを傳へ聞きました。それからもう六年は経ちます。私は再びあの人の上に、あの悲痛と絶望がないやうにと祈らずには居られないのです。あゝどうぞあの人の上に神の恵みがありますやうに！

三

その事は併し決して私に悪い影響を與へはしませんでした。私のやうな生涯を送る者に取つて最も禍ひとなるところの、この世の幸福や快樂を希む心が私にいくら稀であるとすれば、それは早くもその時に棄て去ることが出来たのだと思ひます。この世は決して美しく楽しいものでもなければ、また決して己れの意のまゝになるものではないといふことを、私はその時から感ずることが出来たのであるやうな氣がします。

神はまた私をある時次のやうな世界にお導きになりました。それは私がS學院を出て、最初の傳道

に赴いた某の地方でいた。何處の教會でも同じこと、その中には随分如何はしい信者があるもので、又情けないことには傳道師仲間にすらも往々それが見出されるのでした。私はまだその時は年が若いし経験は浅し、おまけに少し頑固な方でしたから、古顔の人達から可なり意地のわるい仕打ちをされたものでした。或日のこと、常から何故か私に反感を持つてゐるらしく見えたFさん——先輩の傳道師の夫人でした——が、とつせん私に、

「野村さん、あなたはどんな人でも愛することが出来ますか。」と殊更らしくさう言ひます。

「はあ、愛さなければならぬと思ひます。愛することが出来るとも思つてゐます。」

「きつとですね。」とFさんは皮肉らしく念を押しました。

「はあ。」

「ちやどんなところにでもいらつしやる事が出来ますね。」

「ええ。」

「きつとですね。」

私はなんだか厭な氣がしました。でたゞ簡單に「ええ」と答へました。

「ちや私に躓いてらつしやい。」

かう言つてFさんはさつさと先に立つて歩き出しました。

「何處にまゐりますんですか？」

「まあ黙つて私についてらつしやい！」

私達はそれから一言も口を利きませんでした。私導かれるまゝに黙つてそつとそのあとに蹤いて行きました。すると町をどん／＼出外れて、或る山奥の方へとはひつて行くのです。この邊の地理を少しも知らない私は、少しく不安になつて來ましたけれど、猶黙つて蹤いて行くと、ドさんはやがて山の上の小綺麗な一軒家の前に立ち止つて、

「さあこゝですよ。」と何ともいへぬ皮肉な笑ひやうをして私をふりかへりました。

「御免下さい！ 教會からお話をしに上りました。」

かう言つてドさんは障子をあけて私を土間に押し入れるとい、びたりとその戸を閉めてさつさと歸つて行つてしまひました。

その聲を聞きつけて奥から一人の若い女が顔を出しました。その顔を一目見ると私の足はぶる／＼と慄へました。するとまた、同じやうに眞白い顔の女が、妹の肩越しに顔を出して、猜疑深さうに私を眺めました。私はさすがに躊躇しました。けれども思ひ直して……といふよりは、その時Aの記憶が私を勇気づけたのです。Aの眼が神の權威をもつて靜かに私の心を見まもつてゐるやうな氣がしました。その眼の前に私は柔順でなければなりませんでした。しかもそれは私にとつて決して偽善では

ありませんでした。私は丁寧に挨拶をして町の教會からお話のために遣はされたことを告げました。するとどうでしたらう！ みるから素直な顔をした妹の方は、おど／＼と臆病さうに私をぬすみ見ながら、

「どうか私達を殴らないで下さい！」と柱に縋つてさめ／＼と泣き出すのです。

「さうだ、この人は私達を殴りに来たのだ！」と姉の方も腹た／＼さうにさう言ひました。

私はその意外とも意外な言葉に驚きましたけれど、また確かに恥かしさに顔があげられないやうな氣もしました。私自身には決してそんな殴りものにするなぞといふ心は微塵もありませんでしたけれど、現に下のために、また吾が多くのお仲間のために、甘んじてその批難を受けなければならぬやうな氣がしました。いや／＼この場合私が一人いゝ子になることは許されません。嘲りや嫌惡の情を制し得たゞけでは、まだ決してこの攻撃に恥ぢないとは言はれないのですから。

私の魂はその時羞恥の感じのために至純になることが出来ました。憐れみのためよりも、なんともいへぬ感激のために自づと泛んだ涙と、誠實の無言とが不幸な人達の心をいくらか和げることが出来ました。ともかくも私は奥まつた小座敷に通されました。

姉の方は年頃二十七八にもなりませうか、妹はまだやつと二十を二つか三つ越した位にみえました。二人とも頭に手拭をかぶつてゐるのですが、それは多分どんな場合にも取ることは辛く出来難い

ことだつたに違ひありません。私はなるべくその心に痛さを感じさせないやうにと絶えず目を伏せては居りましたが、しかし二人が油断なく私を観察しやうと注いだ眼付きを氣附いてゐました。私の熱心はとにかく二人を安心させることだけは出来ました。けれども私が覺束なく説く神の愛については、初めから笑つて對手になりませんでした。神や佛は餘所の不幸を知らない人達が信ずるもので、自分達のやうな世にも人にも見棄てられたものには、何の甲斐もないものだと思ひ張るのでした。若し神の恵みといふやうなものがこの世にあるならば、自分達がかうならぬ前に救はれなければならぬ、自分達はこの不幸に値するやうな惡事を何もしてゐないのだからと反證するのです。けれども私は自分の知識の不足を感じながらも、三時間ほど一生懸命に話をしました。キリストが癩病患者を醫した話を例にひき、又神は決してどんな人の魂をも見棄てられるものではなく、たゞ神の見棄て給ふのは、悔ひ改めることの出来ない魂であることを話した時には、二人は熱心に耳を傾けてゐました。私がこの薄倖な二人の姉妹のために心から祈りをあげました時には、二人は眼に涙さへためてゐるやうでした。

私はその後二三次この奥山の隠れ家を訪ねました。二人はそのたびに、凡そこれほど眞味な歡迎を私がまだ受けたことがないほどに喜んで迎へてくれました。二人の父といふ可哀さうな老人にも會いました。老人はこの世に見棄てられた娘達を訪ねてくれる唯一の人であるといつて私に感謝し、

眼に一ぱい涙をうがべながら、私が聞かうともしない物語を初めるのでした。

老人は其町の可なり有福な、素姓の正しい質屋の次男に生れました。若い時分に商用で或る村を通りかゝると、一人の年若い娘が、途中から道連れになつた旅人の爲めに危い目を見やうとしてゐるのに出逢ひました。若者はそれを助けて自分の町に伴ひ歸りました。娘は一人の身寄りもない孤子といふことで、行き着く先々に奉公を探さうとはるゝ旅をして來たといふ話でしたので、哀れを催した若者の家では、丁度女中の代りを求めてゐた時だつたので、そのまゝ家に止めて手傳はせることになりました。するうちにもとゝ器量はよし、素直な性質でもあつたので、若者はつひに兩親の許しを得てそれを自分の妻にすることになりました。間もなく二人の娘が生れ、母親は二度目の産の肥立ちが悪いために、とうゝ若死をしてしまひました。その残された二人の娘の後の運命こそは、またとない哀れなものだつたのです。父親は悲しみと恐怖のうちに娘達の家を建て、あまり人目に觸れないうちに二人を山の中に隠しました。さうしてまだ盛りの長い餘生を、娘達のたい一人の對手となつてこれまで過して來たのでした。

「わしは何もしない。こんな報ひを受けるやうな悪いことは何もしなかつた。人を助けたのが悪いのか、憐れみを起したのが悪るかつたのか？ わしにはわからない、わしにはわからない！ それともわしの前世が罪深いのかな？」と老人は首を振つてゐました。

不思議なことには、私のその行爲がひどく教會の人達の反感を買ひました。それに私も亦、人を傳道するにはまだ／＼自分の修養が、人格的にも知識的にも缺けてゐるのを感じさせられてゐた時でしたから、間もなくそこを切り上げて再び實際の生徒となるために上京しました。

こんな風に、私は決して自分から進んでかうした場合に立ち入るのではないのに、どういふわけか、癪病の人達には縁があるのです。私の心はそれを寂しくも思ひます。けれども神様は、私がさういふ人達の稀な慰藉者であることを望まれます。さうして私のAに對する自然な情操も亦、私の寂しい生涯に満足を感じるでせう。

さてあなたはもう何故私が今のやうなことをしてゐるかとお解りになりましたでせう。それについても私に多少醫學の知識が必要だつたのです。少しは看護法についても知らなければなりませんでした。あの病氣を醫學上から研究してかゝるほどの餘裕と暇はありませんから、私はまづ今のこの境遇を選んだのです。あの人達になくてならないものは、醫藥の力よりも何よりも、たゞ一人の友達なのですから——。』

四

病院の夜はまたとない静かさに更けて行きました。丁度夜行の巡查のやうに、門衛の老人が角燈の

光りを走らして廊下を見廻つて行く靴音が、規則正しく遠ざかつて行くと、すんだ物語の後の静かな無言が、なんともいへぬ權威をもつて私の精神を包んで行くやうな氣がしました。その覆布は氣高い香氣を含んで私の濁つた思想を刺戟し、私の曾て見なかつた知らなかつた世界の存在を暗示しました。それは全く不思議な暗でした。さうして又、眞と善と美とに輝いた顯はなる奇蹟でした。併しながらその新しい世界は、私の過去の生活に馴れた眼からは、どんなに奇異に見えたことでしたらうか！ 恰も夜が、暗に棲み馴れた鼻にとつての晝である如く、私の光りは新しい世界の暗であり、その光りは私がこれまで踏み躪つてゐた地上から差して來るのでした。なんとといふ不思議な朝！翌日私達は無事に退院しました。なんととはなく振り返られた慈善病院の一構へは、嚴然として世間に歸つて行く世間の繼子——しかもそこより外には歸るべき家を知らなかつた——を見送つてゐるやうな氣がしました。

再びもとにかへつた孤獨と貧苦の生活に於て、私は度々野村さんのことを思ひ出しました。時には懷かしく、時には馬鹿くしく、殊に世間に對して私の心が反抗的になる時、あの人がもどかしいやうな、馬鹿にしたやうな意味でその單純さを羨むやうな氣を起しました。けれどもふと、あの夜の不思議な氣分が甦つて來ると、再びあの暗が私の心に崇高な光りを投げて、頬の肉の引緊るやうな或る緊張を齎るのでした。そしては、何かある、何かある」と、私の魂は垣間見たその不思議な世界

に凝視をついけるのでした。——それは私の信仰の芽生でした。

芽生！ なんとといふ意味の豊かな言葉でせうか。何かある、何かあると求め尋ねる心が一日く私の心にはぐまれて行きました。それは丁度ものゝ種が地の乳に恵まれて日から日へと芽ぐんで行くのと同じやうに。さうして私はとうとう、昔の人が異國の黒船を見るやうな感じで見てゐた教會に出入をする身となりました。けれども私は初めひどく失望をしなければなりませんでした。何故ならば教會は私の知りたいと願つてゐるその「何か」を、直接に文具體的には説明をしてくれませんでしたから、人々は誰も、なるべく人目に觸れない隅の方の椅子に腰を下して、熱心に牧師の説教にありたけの注意を傾けてゐる私に氣づきはしなかつたでせう。或は私はさうしていつまでも人の袖の影に、自分た一人の信仰を保つたのであつたかも知れません。けれども私の子供はいつの間にか私を教會の人達の真中に押出して丁ひしました。人々は可愛い子供の母親として、初めて私を見出したのです。どういふ生れつきか、あの子はほんとに誰からもく可愛がられました。その年のクリスマス餘興にエンゼルとなつて喝采を博してから、しまひにはエンゼルといふのがあの子の通り名になつてしまひました。

子供の心にはなんの無理もなく、如何にも素直に神の意志が働きました。その街はない飾らない、しかもあの子にとつては自然な心の流れに、私は時々自分の汚れを恥ぢなければなりませんでした。

さうして母としての愛の意識の前に、私は是非ともよりよきものに、ならなければならなかつたのです。さうして知らず／＼の中に、私はその「何か」を漸く會得することが出来たやうな氣がしました。その後の一人の信者としての私については、私はまだあまり語ることを持ちません。たい、今こそ私は私の過去の醜い姿を人々の前にあばいて、今の心持ちに對象させなければならぬやうな氣を、可なり必要とまでに感じて居ります。しかしそれはきはめて簡単な物語ですみます。

私は十二の年に全くの孤子となりました。さうしてその時から、町で眼科醫を開業してゐる伯父の家に引取られました。それから四五年の後、私がある夏の休みに女學校の寄宿から歸つてみると、一人の美しい青年が伯父の藥局に手傳つてゐるのを知りました。これが後に私の子供の父となつた者です。私は女學校を卒業して再び伯父の家に歸つて來ました。私の過ちと罪はそれから初まります。自分の行爲の結果に恐れを抱いた青年は、無責任にも私の純な信頼を踏み躪つて逃走しました。私は私の罪の實を獲ました。思慮の不足から來たふとした過失のために、自分の一生を自ら葬らなければならいませんでした。けれども何よりもの犠牲だつたことは、信じやすい感激しやすい私の性情を、すっかり美と善とに背けさせて了つたことでした。疑ふこと、憎むこと、を私は知りました。また私は自分の罪を罪とも思ひませんでした。たゞ人を信じた自分の愚かさばかり齒がみをしました。昔の臆病な青年、無責任な一人の子の父は、今斯界の利き手としてなか／＼幅を利かしてゐます。その者を

私は憎んで憎んで來ました。

けれども今は……さうです今は、私は彼のたのにも祈ることが出來ます。そのために覺えるこの得難い悦び、得難い安かさは、そも私にどんな値打ちがあるために味はれるのでせうか？「私は何もしてゐない、こんな恵みに浴されるほどの善き行ひを私は何もしてゐない。」と、あの哀れな老人と反對に私はかう叫びたくなります。子供は私の罪の實です、けれども罪の枝に熟したものとては、なんといふ勿體ない實だつたでせうか。

あゝ！すべては神の意志のまゝに働きます。たとひそれが、人には全く思ひ掛けぬことであらうとも！天のものは天に行き、地のものは地にかへる。與へられたものは與へられてゐる間だけがその人のものに屬してゐます。あの子はもはや私のものではありません！あの不思議な、あの恐ろしい出來事……（彼女の聲は俄に慄えて來た。彼女の子供は一昨日友達の家の前で何氣なく遊んでゐるところを、或富豪の——それが××の一族だといふ——の自働車に轢かれて不慮の死を遂げたのである。）それは一體どういふことなのでせう？何を意味してゐるのでせう？一度死にかけたあの子の命が救はれて、救はれたあの子が死んでゆく……しかも無造作に、むごたらしく、おゝなんてあのさまは！あの子は死んだ、あの子は死んでしまつた。あの子の骨を碎いたあの四つの忌はしい輪は、その瞬間に私の胸をも轢いて行つたのです。——何故さうならなければならないかつたのでせう？

お、私はまた迷ひにかへつたのかしら。何事もたい神様の思召であるといった口の下から！ あの子の背には今眞白な二つの翹がある。あのクリスマス夜のエンゼルがあの子だつたでせうか。あのエンゼルが私の子供を天國に連れて行つたのでせうか。今、私に夢や幻は懐しい。その懐しい幻は、あの子を一人の天使として私の傷けられた胸を慰めます。もしかしたらあれはほんとうに天使であつたのかも知れません。勿體ないけれども思はなければ諦められないやうな氣がします。さもなくば、さもなければ私の罪の子にしては、あまりに尊く清すぎましたもの！ しかじさうとすれば、私のいつにそれほどの恵みに浴されるやうな行ひがあつたでせうか？

…神様は私の過去からは何も望まれないのでせうか？ たい悔ひ改めるといふことより外には！ さうして靜かに優しく私を見守つてゐらつしやる…さうだ！ 私は自分の過去を價値なく思へば思ふほど、これからの生活でそれを償つて行かなければならないのです。あの子は私の信仰の芥子種でした。今や親種は腐れてその骸は地にかへつて行きます。けれども根から根へ、芽から枝へとその力は永久に生きて行きます。永遠にその活動は止まないのでせう。…あゝ全能なる神に榮あれ！ 皆様よ、どうぞ天に讚美の歌をうたつて下さい、さうしてあの子の昇天のために祈り下さい！ 彼女は息も絶えなくに興奮して來た。涙が潜々と頬を傳はつて流れた。それは彼女の幼き娘の不時の死に於けるその葬りの夜であつた。さゝやかに集つた數人の者は聲もなく始終うなだれてゐた。